KYOTO KEIKAN FORUM 2017 ANNUAL REPORT

景観整備機構
NPO法人京都景観フォーラム
/年次報告書

目次 / CONTENTS

03　深草プロジェクト
04　七条通界わいプロジェクト
04　緑景観プロジェクト
05　鴨川景観プロジェクト
05　祇園新橋プロジェクト
06　嵐山の景観まちづくり
06　京都市地域景観まちづくりネットワーク
07　京都景観エリアマネジメント講座
07　景観まちづくり専門家派遣事業

ごあいさつ

京都市が 2007 年に新景観政策を施行してから、今年で 10 年になります。街並みは少しずつ変化してきました。屋外広告物はずいぶんスッキリしました。新しい建物は、歩いていて目に触れるエントランス周りや低層部分に、周囲との調和や植栽などデザインに気を配られたものも増えました。これらは京都市民の理解と努力、少なからずの犠牲(負担)があってこそ、なのでしょう。

これからは、私たちが創造しているものが、文化となり歴史となるように、さらに進化させ深化させていかなければならないのだろうと思います。

京都景観フォーラムでは、景観まちづくりに関連する事柄を広く学びながら、市民に寄り添って「景観まちづくり」をすすめていくことをモットーに、研鑽を積み重ねています。

今後とも、ご支援ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

理事長 / 内藤 郁子

執筆者紹介(五十音順)
小林明音 /p.5
篁正康 /p.3
内藤郁子 /p.7
中村伸之 /p.4
森川宏剛 /p.5,6,7
有限会社エイブル / 編集デザイン

景観整備機構
NPO法人京都景観フォーラム
/年次報告書
発行 / 2017 年 5 月 27 日
FAX：075-491-9663
メール：kkf@kyotokeikan.org

深草プロジェクト

文：篁 正康　*Takamura Masamichi*

1, 深草まるごとつながりネットワーク

深草支所の委託を受け、支所主催のまちづくり事業として、『深草のみどりの保全整備から再生へ』をテーマに、大岩神社周辺をフィールドとした環境整備に取り組んだ。

大岩神社は、古くからの歴史があるとともに、画家『堂本印象』寄進の大小二体の鳥居も現存するといった、地域資源としての価値と、その展開の可能性を持つ。

図：事業の流れ

しかし、現状は、2年前より神主不在となり、神社としての機能がなくなったことに加え、台風等による倒木の影響により鳥居が折れ、社が傾き、荒廃した状態となっていた。元々結核等の治癒を目指した遠方からの信者が多かったこともあり、地域にその存在、価値、現状の認識が少ないことが課題としてあった。そのため、現状を知り、価値を認識することから始め、『知る』⇒『学ぶ』⇒『行動する』という3ステップで事業を進めることとした。

第1段階の『知る』では、現地のフィールドワークにインスタントカメラを使って、参加者自らその現状把握を行ったり、深草トレイル一斉清掃ウォークに参加し、広域から、大岩神社を取り巻く地域の課題を把握することとした。

第2段階の『学ぶ』では、京都府立堂本印象美術館の協力のもと、画家『堂本印象』にスポットを当てた活動を行った。印象の人物像、深草とのかかわり、作品の特徴等について、参加者が深く学ぶ機会を設け、鳥居の価値を認識し、地域資源として活用する機運を高めることを目指した。

これらを基盤として、第3段階の『行動する』では、実際の環境整備作業を進めた。目的や活動内容を検討するワークショップを経て、参加者それぞれの目的に応じたチームを形成し、以下の活動につなげていった。

整備活動後の談笑の様子

〇『土木・建築チーム』
　：倒木撤去、溝の再生、社の木の伐採等
〇『建物再生チーム』
　：社務所の清掃、小屋の撤去、黒板の設置等
〇『魅力発信チーム』
　：活動記録冊子の編集、鳥居の拓本化等
〇『おもてなしチーム』
　：活動後の参加者への軽食の提供等

これらの活動を通して、大岩神社周辺は以前の姿に比べ、大幅な環境改善がなされた。また、本活動と大岩神社の魅力を地域に周知するための冊子をまとめ、配布した。

学生から高齢者までの幅広い市民の参加、また古材文化の会や各大学等の協力も得られ、事業全体を通して、主体的に楽しみながら実施する姿が見られた。今後は、整備活動の継続に加え、地域資源としての発信・活用の取り組みが望まれる。

2, 鴨川運河会議

昨年度市民活動として自立した『鴨川運河会議』に並走する形で、運営のサポート、行政との連携支援、シンポジウムの共催等を行った。

写真：シンポジウムの様子

現在の鴨川運河会議は運営主体が形成され、月一度の定例会において活動の方針を決めている。定着事業となってきたウォーキングやカフェ、資料の収集・展示、シンポジウムの開催等を通して、地元や行政との間で、鴨川運河の近代土木遺産としての価値共有を行った。シンポジウムでは、名古屋市の中川運河での取り組み等から地域間連携の模索を行った。行政との協議を通し、撤去予定であった岸和田レンガの舗装を保全することもでき、鴨川運河会議はその活動の幅を広げつつある。

写真：ウォーキングツアーの様子

七条通界わいプロジェクト

文：中村 伸之　*Nakamura Nobuyuki*

京都駅東部の崇仁地区では京都市立芸術大学の移転を核とした地域再生まちづくりが行われている。

本プロジェクトでわたしたちは、崇仁エリアマネジメントや芸術大学と連携して、地域の歴史研究・シンポジウムに協力し、地域と大学の未来像を探った。

写真：崇仁高瀬川保勝会立ち上げ会での芸大生の演奏

京都駅周辺は鴨川に隣接し高瀬川が流れ、寺社仏閣や大規模公園が点在し、NPO 法人 KES 環境機構が「緑の回廊ネットワーク」を提案している。当地区においては、高瀬川や既存樹木を活かしたエコロジカルな都市再生がふさわしいと考え、地域環境構造をスタディし、崇仁高瀬川保勝会の立上げをお手伝いした。

図：鴨川・東山につながる七条通界わいの緑（google map より）

崇仁・芸大の「風の道」
高瀬川や緑地の連続が東山・鴨川からの風をまちなかに呼び込む。ここに東山の木や草を植えると、花や実に誘われて、鳥や虫たちが風に乗ってやって来る。鳥たちが種を運んで、まちなかに森が育つ。

図：エコロジカルネットワークのスタディ

緑景観プロジェクト

文：中村 伸之　*Nakamura Nobuyuki*

平安時代に造営された堀川通は建物疎開や埋め立てによって、幅員 50mの大通りとなったが、御池通から五条通までの区間には幅員に見合った豊かな緑がなく、魅力や親しみが感じられない。戦争や高度経済成長の混乱のまま成熟しきれない景観だといえる。

写真：堀川埋立前の風景。チンチン電車とヤナギ並木

写真：まちづくりカフェで緑の景観ビジョンを描く

図：堀川通の緑の景観シミュレーション

中京区主催ののマチビト Café をきっかけにメンバーが集まり、「堀川みどりのまちづくり会」を立上げ、①地域の歴史を知るヒヤリング、②景観や生業を調べる町歩き、③その成果を共有する懇話会、④緑の景観を考えるまちづくりカフェ開催、⑤以上の成果をまとめた冊子「堀川みどりのまちづくり」を作成し配布した。

鴨川景観プロジェクト

文：小林 明音　*Kobayashi Akane*

京都市の中心部を流れる鴨川について，都市における自然空間と人の営みの調和をテーマに鴨川あるきを実施した。

写真：企画展示「鴨川から見る、京都の近代から現代」

平成 28 年度は「鴨川おむすび紀行」と題して、平成 28(2016)年 4 月 9 日(下鴨神社～上賀茂神社)、7 月 23 日(出町柳～四条大橋)、10 月 8 日(雲ヶ畑)の 3 回開催し、それぞれ信仰と鴨川、川と町の成り立ち、鴨川の源流域の暮らしについて、地元の方のお話を伺った。

写真：七条大橋をキレイにする会（毎月７日９時から清掃）

また、竣工 104 年を迎えた七条大橋の歴史的、文化的、景観的価値を広めるため、「七條大橋をキレイにする会」の活動に協力している。毎月 7 日 9 時からの清掃活動に加え、8 月には企画展示「鴨川から見る、京都の近代から現代」を共催し、七条大橋に関する資料の展示を行った。

祇園新橋プロジェクト

文：森川 宏剛　*Morikawa Hiroyoshi*

祇園新橋の風情をこれからも守る

□協議会の設立

祇園新橋伝統的建造物郡保存地区を中心とした祇園新橋地域は、元吉町、橋本町、末吉町、清本町の 4 町内にまたがる地域である。近年、お茶屋は減少し、飲食店、物販など多様な業種、業態が増えている。これに伴い、地域外からの人の流入も多く、旧来からの地域住民相互のつながりは希薄になる傾向が続いている。このままでは、祇園新橋の風情を将来にわたって守ることが出来ないのではないかとの危機感が生まれている。

そこで、約 2 年前に元吉町町内会を中心に、元吉町まちづくり部を立ち上げ、地域の清掃活動、辰巳大明神の祭事などの活動をより多くの人の参加を得ながら進めると同時に、地域の風情を守る取り組みや景観づくりをどのように進めていけばよいかについて、勉強会や話し合いを重ねてきた。

こうした活動を経て、平成 29 年 3 月に、祇園新橋景観づくり協議会を設立、同時に京都市の地域景観づくり協議会制度の認定申請を行った。平成 29 年度は、5 月に認定式および設立パーティも予定している。また祇園新橋の景観づくりの方向を示す、景観づくり計画書の策定に取り組む予定である。

□前撮り対策

一方、地域では、前撮り（結婚式などの事前に、衣装を着てロケーション撮影を行うこと）の数の多さと一部のマナーの悪さが問題となっている。祇園新橋の風情を好んで、ここで撮影をすること自体は喜ばしいことだが、周囲に迷惑をかけたり、お店の営業の妨害になったり、樹木等を傷つけるなどの行為は、控えてほしいことである。京都女子大学や事業者やカメラマンの有志と協力・連携し、前撮りを適切な形で行われるよう働きかけをすることになっている。

嵐山の景観まちづくり

文：森川 宏剛　*Morikawa Hiroyoshi*

嵐山地域では、近年長辻通沿道で、建物の建築が相次いだ。オリックスの保養所、嵐電嵐山駅前の昇龍苑、ひばり座跡の嵐山スクエアなどである。

写真：嵐山スクエア

こうした動きは大堰川沿いでもあり、今後も続くことが予想されている。地域では、長辻通沿いや大堰川沿いの景観形成に対策が必要だとの認識が高まってきた。そこで、地域の景観づくり活動の母体となる嵐山まちづくり協議会の設立と、あわせて建築主に事前協議を義務付ける地域景観づくり協議会制度の活用を目指して、平成 27 年度に設立準備会が立ち上がった。この設立準備会を中心に勉強会などを行ったが、嵐山地域は既存の商業団体、自治組織等が多数存在しており、合意形成が難しい面もあって、取り組みがなかなか進みにくい状況であった。

平成 28 年度には、嵐山スクエアの建築などをきっかけに、改めて対策を考える必要性の認識が広がり、各商業団体の取りまとめの役割を担っている嵐山保勝会のバックアップもあって、若手のワーキンググループをつくった。現在、このメンバーを中心に、協議会のたたき台を作成する作業を進めています。建物のファサードに関して歴史的なデザインなどはあまり認められない嵐山にあって、山、川といった嵐山のよい風景のベースとなっている自然景観と調和する建物のあり方は何か、あるいは、世界的な観光地でもある嵐山において、あまたある商業団体、自治組織などが、どう協力連携できるか、といったことが、課題となっている。

今後、たたき台を完成させ、これをもとに地域の皆さんと話し合う機会を設け、一緒に嵐山の将来像を検討するとともに、実現に向けて力をあわせる仕組みをつくることを目指して取り組む。

京都市地域景観まちづくりネットワーク

文：森川 宏剛　*Morikawa Hiroyoshi*

シンポジウム「景観まちづくりの新たな潮流」を開催

平成 28 年 12 月 11 日（日）下京区のしんらん交流館にて、シンポジウム「景観まちづくりの新たな潮流」が開催された。地域景観づくり協議会制度の認定を受けた 8 地域に加え、市の景観政策、屋外広告物、コミュニティ推進の各部局からパネリストが登壇し、議論を重ねた。

制度の運用が始まって約 4 年が経過し、各地域では少しずつ実績が積み重なるとともに、課題も明らかになってきている。これらの地域が集まった、京都市地域景観まちづくりネットワークでは、この機会に、各地域の取り組みを発信し、自分たちの取り組みの意義を問うと同時に、関連する事業者や新たに制度の活用を検討している地域に、この情報を届けたいとシンポジウムを開催する運びとなった。

シンポジウムでは、8 地域がその特性に応じて独自の工夫を重ね、協議会の運営を行っていることが紹介された。地域景観づくり協議会制度の認知度の低さ、行政との連携の難しさなど、制度利用上の課題が指摘されながらも、地域と地域内で建築行為等を行う事業主が、目指す将来像を共有し、将来世代にどんな景観を残していけるのかをともに考えることから、景観保全・創造に加え、地域コミュニティ形成への導入や強化という点でも有効な制度であることが語られた。

写真：シンポジウムの様子

京都景観エリアマネジメント講座

文：内藤 郁子　*Naito Ikuko*

景観と人と文化の関わりを学ぶ講座

「景観まちづくり」を進める際には、その地域の歴史や文化、経済の状況、人々の暮らし方などのさまざまな情報を読み取り、地域住民の価値観を景観に結実させていくことが求められる。本講座では、こうしたプロセスに関わる各方面の専門家を養成することを目的に、景観まちづくりに関する幅広い分野の基本的な知識を学んでいる。

本講座では、景観とは何かという基礎理論から、京都のまちの特性と歴史を学ぶとともに、建築や土木・ランドスケープ、政策や法律、まちづくりなどの理論や考え方などに視野を広げつつ、日本人の美意識や作法も取り入れている。基礎講座では全 8 回を通じて「景観まちづくり」についての基本的な視点を身につけ、実践講座ではフィールドワーク、ワークショップなどを通じて、景観まちづくりを支援するための姿勢と技術を学ぶ。修了後、「京都景観エリアマネージャー」として登録し、当法人の景観まちづくりの活動に取り組んでいる。

現在までの基礎講座の受講者数は 193 名（単回のみの受講者を除く）、実践講座の受講者数は 82 名、京都景観エリアマネージャーの登録者数は 54 名となっている。

今後もさらに景観を学び、地域の「景観まちづくり」を支援する専門家が増えることを期待している。

平成 28 年度　カリキュラム

□第 7 期 基礎講座（通年受講者 26 名）

	テーマ	講師
第 1 回	基礎理論（1）景観とは何か	堀繁氏
第 2 回	基礎理論（2）景観のマネジメント	宗田好史氏
第 3 回	京都のまちの形成と景観史	高橋康夫氏、中川理氏
第 4 回	土木と景観デザイン	山田圭二郎氏、篠原修氏
第 5 回	京の生活文化	谷晃氏、矢ケ崎善太郎氏、笹岡隆甫氏
第 6 回	建築とランドスケープ	江川直樹氏、佐々木葉二氏
第 7 回	景観政策と法律	飯田昭氏、石田光廣氏
第 8 回	景観まちづくり・修了式	髙田光雄氏

□第 6 期 実践講座（受講者 9 名）

	テーマ	講師
第 1 回	景観	堀繁氏
第 2 回	色彩	渡辺安人氏
第 3 回	ファシリテーション	中田豊一氏
第 4 回	修徳学区のまちづくり	門内輝行氏
第 5 回	ワークショップ	京都景観フォーラム
第 6 回	レポート発表・修了式	髙田光雄氏

景観まちづくり専門家派遣事業

文：森川 宏剛　*Morikawa Hiroyoshi*

京都景観エリアマネージャー（以下、エリマネ）は、平成 28 年度末で登録者 52 名となった。景観フォーラムでは、エリマネの活動の一つとして、地域や公的機関などの要請に応じて、専門家の派遣を行っている。

写真：「地域景観づくり講座」の運営の様子（京都市景観・まちづくりセンター受託事業）

平成 28 年度は、以下のように 15 件、のべ 65 名の派遣を行った。また今年度は、祇園新橋地域や嵐山地域のように、昨年度の相談から発展してまちづくり協議会の立ち上げ支援を受託することとなった地域もある。それぞれの専門性に磨きをかけること、まちづくりの協働の作法を身に付けることを大切にしながら、活動を広げていきたいと考えている。

◎専門家派遣の実績

[平成 28 年]		
6 月	北区まちづくり支援事業	（1 名）
〃月	先斗町連続セミナー	（1 名）
7 月	不動産コンサルティング協会例会	（1 名）
8 月	京都市景観市民会議	（4 名）
11 月	龍大みらプロシンポジウム	（1 名）
〃月～	藤城学区ビジョン策定	（3 名×6 回）
〃月～	京都市地域景観づくり講座 ファシリテーター	（2 名×2 回）
12 月	建築士会近畿建築祭	（1 名）
〃月	大谷大学 Happy hour !	（1 名）
[平成 29 年]		
2 月	歴史まちづくり推進協議会	（1 名）
〃月	京女奈良女合同シンポジウム	（1 名）
3 月	京都市建築協定連絡協議会勉強会	（3 名）
	まちづくり共同研究会	（3 名×3 回）
	北崇仁エリアマネジメント	（12 回）
	平成の京町家コンソーシアム	（7 回）

KYOTO KEIKAN FORUM

NPO法人京都景観フォーラム
http://kyotokeikan.org/
FAX : 075-491-9663
MAIL : kkf@kyotokeikan.org

発行日 /H29.5.27